



kiss 詩は音楽に恋してる

主催 福智町子ども読書プロジェクト実行委員会

心に響いた言葉と音のハーモニー…。言葉の持つ力や魅力を感じた谷川さん親子によるステキな公演を特別インタビューの内容とともにお届けします。

隣

の家にネロっていう犬がいて、垣根越しにしょちゅうウチに遊びに来て

たもんだから、仲良くなつて…でもその犬が2年で死んでしまった。その時感じたことを割合書き直した記憶があります。谷川俊太郎さんが18歳の時に書いた詩「ネロ」。冒頭でこの詩を朗読する姿に会場が引き込まれる中、谷川さんは当時を思い浮かべるようにやさしく語りました。

僕は18歳から詩を書き始めて、もう60年くらいになつてます。おしゃべりになつてしまつて、その時に書いた詩が「20億光年の孤独」、最初の詩集の題名です。この最後に、「20億光年の孤独に僕は思わすくしゃみをした」とありますが、その理由をよく聞かれるんです。ハッキリとは分らないんだけど、たぶん、20億光年という人間のスピードを超えた大きな事を考えている自

分が、本当に小さなくしゃみするよ様な存在なれていうのがおもしろくて、一種のユーモアとして書いたよ

うな記憶があります。一人の子だつたせいもあるか、あまり人間関係で悩んでなかつたんですね。そのころは、だから、自分がどこにあるかについて位置を宇宙との関係で考えたような感じがあつて、自分は地球上に生きてる歌だけ、その地球にちよつと遊びに来たよ様な、そんな感覚があつたよつと思ひます。

地球への「クニツク」や「ちよつと」などの詩、なく、作詩者本人による朗読にひそりと聴き入る客席、その響きと和らげるように、谷川さんは詩について説明しました。詩の朗読は聞き慣れないけど、ちよつと受け取りにくいんじゃないかと思ひますね。落語とは違ひ。もつと何か、物語があればたどりやすいんだけど…。詩はだいたい美辞

詩はそれぞれが自由に好きに受け止めるもの。自らの感性に自信を。

共鳴した。言葉と音楽の魅力

Shuntaro Tanikawa Kensaku Tanikawa



谷川俊太郎氏

詩人 / 脚本・翻訳家 / 絵本作家

1931年生まれ。父は哲学者で法政大学学長の谷川徹三氏。1952年に第一詩集『二十億光年の孤独』を出版後、詩・エッセイ・脚本・翻訳などの分野で活躍。現代を代表する詩人。



谷川賢作氏

ピアニスト / 作・編曲家

1960年生まれ。谷川俊太郎氏の子。ジャズピアノをはじめ、映画『四十七人の刺客』やNHK『その時歴史が動いた』テーマ曲など作・編曲でも活躍。音楽・映画部門での受賞多数。



会場となった地域交流センターのロビーには谷川俊太郎さんが手がけた絵本や詩を展示。教科書にも出ている『スイミー』など著名な作品が並びました。

題句で、言葉で作った細工物ではあるんですが、言葉っていうのは全部現実から生まれてくるものだから、我々の毎日の生活というものの無意識に、詩も生まれてくるんです。

朗読ばかり聴いてると疲れます。うんじやないかと思つて、「…と会場を気遣う父へ、息子の賢作さんが深く心に届いてるはずですよ。父は年をとつて心配性になつてくるから、会場のみなさんか反動してあげてくだささい笑」とユーモアたっぷりのトークで、場は一気に和みました。

「真剣に生きる」といって、控入までインタビューに答えてくれた

ている姿がとても印象的でした。谷川俊太郎さんが作詞した『鉄腕アトム』をはじめとする歌の披露や作詩のエピソードなどの紹介で、公演は終わりに近づくと盛り上がりをおさめます。マンツールの詩の朗読「生きている」も、多くの観客がハンカチを手で涙をぬぐっていました。

さつた谷川俊太郎さん 精神を集中したり、面白い発想を待ってみたり、ぶつと詩の一行が湧いたり、作詩のスタイルや過程は、それぞれの詩によつて違ひます。

私はマスメディアが伝える子ども像しか知らないだけで、果たしてそんなのかなと思ひます。自分も幼いころは相当くだらないものを読んでいたし、歴史的人物をリアルに描いた物語とかね。そういうものが今役に立っていないかと言へば、そうではない。子どもたちは大人を羨ましくしないで、自分の感じ方、表現の仕方、そういうものに自信を持つて欲しいですね。そういう生き方は自分自身によつて、詩を作るうえでも欠かせないものになっていきます。



日時:2008.3/1 PM 2:00- 会場:福智町地域交流センター 参加:約300人

特集 公演を聴く。